

## 12 花のような一生

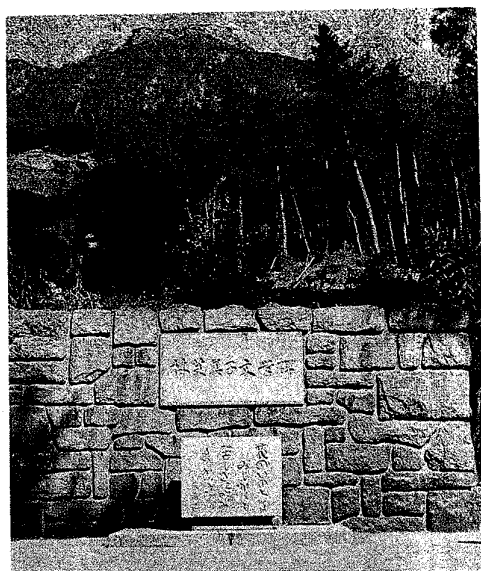
〜 林 芙美子

みなさんは、桜島の小高い丘の上に立つ「林 芙美子」という人の文学碑をおとずれたことがありますか。その文学碑には、つぎのような言葉が書かれています。

花のいのちは みじかくて 苦しきことのみ 多かりき

林芙美子という人は、昭和の初めのころに多くの小説を書いたすぐれた作家です。

芙美子は、生まれるとすぐに母親の故郷である鹿児島市の桜島に引っ越して来ました。しかし、まもなく、父母に連れられて、九州内をあちらこちらといるいろいろなものを売り歩く生活をしなければなりません。決まった家もない、旅から旅への大変に貧しい生活で、その日に食べるお米も買えないということもめずらしくありませんでした。ですから、芙美子も小学生のころか



ら、糸つなぎの手伝いをしたり、パンやちくわを売り歩いたりしていました。

しかし、本を読むことが大好きな芙美子は、そんな貧しい生活の中でも、少ないおこづかいで古本を買っては読んでいました。そして、いつのころからか進学して好きな文学の勉強を続けた  
いと思うようになりました。

「お母さん、わたし女学校へ行って勉強を続けたい。」

芙美子の言葉に、ふだんは優しいお母さんも、

「こんな貧しい生活では、学費がくひなんか出せないよ。あきらめておくれ。」

と、首を横にふるばかりです。それでも、芙美子は本をたくさん読んで、母の反対を押し切って女学校へ入学しました。昼は学校へ通い、夜は工場で働きながらの苦しい日々が続きましたが、好きな文学の勉強ができる喜びでいっぱいでした。そして、いつのころからか芙美子は、自分でも小説を書いてみたいという夢を持つようになったのです。

そして、女学校を卒業すると、作家になるという夢をめざして、東京へ出たのです。

東京へ出てはみたものの、そのころは女の人の働く場が少なく、もらうお金も少ない所ばかりでした。芙美子は、旅館や工場、ふる屋などで働き、苦労を重ねながらも、文学への夢を忘れて

はいませんでした。

いそがしい仕事のあいまに、詩や小説を書いては、それを新聞や雑誌ざっしにのせてもらえるように、新聞社や出版社しゅっぱんに頼たのんで回まわっていたのです。しかし、名もない芙美子ふみこが書いたものを、取り上げてくれるところはなかなかありませんでした。町じゅうを歩き回り、足がぼうのようになってしまうこともしばしばでした。

貧しい身なりで、大事そうに原稿用紙げんこうをかかえた芙美子ふみこが、

「よろしく願ねがいします。ぜひ、読んでみてください。」

と、いのるような気持ちであずけた原稿も、いつまでたっても読まれることなく、出版社のかたすみではこりをかぶったままになるのです。

ある日、芙美子ふみこは、何か月もかかって仕上げた作品を出版社に届けました。

「今度の作品は、自信がある。きっと読んでもらえるにちがいない。」

そんなことを考えながら、出版社から帰り着くと、速達そくたつが届といています。急いで中を見つみると、何とそれは、さつき出版社にあずけてきたばかりの原稿ではありませんか。一ページも読まずに、わざわざ速達で送



り返してきたようです。これには、楽ら天てん家かの芙美子もさすがに、

「わたしのよくな、名もない人の作品なんて、結局、取り上げてはもらえないんだ。」

「わたしには、才能がないのだ。小説なんかやめてしまおうか。」

と、子供のころからの小説にかけの夢がくじけそうになるのです。

それでもすぐに、芙美子の負けん気は、むくむくと頭をもたげてくるのです。

「詩や小説を書いている時が、一番わたしらしい自由な時間だわ。」

「詩や小説を書いていると、お金のないことも、ひもじいことも忘れてしまうのよ。」

そう言いながら、また、ペンをにぎるのでした。

昭和五年。そんな芙美子の努力がむくわれる日がやって来ました。

芙美子の若いころの日記をもとにして書かれた小説「放浪記（ほうろうき）」が、「女人芸術（にょにんげいじゆつ）」という雑誌に発表されたのです。長い長い苦労がついに実ったのです。芙美子の喜びようは大変なものでした。雑誌を手にした芙美子は、大声でさげびながらはね回りました。

「ちよっと、みんな。わたしの作品が雑誌にのったのよ。わたしの作品が認められたのよ！」

芙美子は、だれかれなく雑誌を見せて回りました。

この『放浪記』は、芙美子自身の大変な貧乏びんぼうと苦勞の体験をもとにして書かれたものですが、少しも暗くじめじめしたところがありません。芙美子のほがらかさ、がまん強さ、温かさ、作品全体を包み込み、多くの人々を引き付け、ものすごい勢いで売れていきました。そして、文学の専門家たちにも、大変すぐれた作品であると評判ひょうばんになりました。

こうして、作家として有名になった芙美子は、すぐれた小説を次々と発表し、一生の間に三万枚もの原稿を書き上げました。しかし、作家としての無理がたたったのか、芙美子は、四十七歳さといの若さで亡なくなりました。

『花のいのちは みじかくて 苦しきことのみ 多かりき』とは、幼いころからの苦勞の連続にも負けず、いつも明るく、夢の実現を目指して努力を重ね、大きな大きな花を咲かせながらも、短い一生をとげた芙美子自身を言い表しているようでもあります。

芙美子は、死ぬそのときまで、ペンをはなさなかつたそうです。

